

地域との協働によるキャリア教育の充実 ～地域協働の組織づくりを通して～

桑名 和宏

金沢大学大学院教職実践研究科 学校マネジメントコース

【概要】本研究は、地域との協働によるキャリア教育の充実を目指した実践である。社会が高度化・複雑化していく中、学校だけで諸課題を解決していくことは難しくなっている。教員は限られた職業経験しかない場合が多い。それでも、社会の変化やニーズに対応していかなければならない。そのためには、教育活動に必要な地域等の外部の人の力や資源を活用していくことが求められる。本校では、地域と学校をつなぐためのシステムが確立されていなかった。そこで、キャリア教育充実のために地域と学校が融合した組織づくりを行うことにした。キャリア教育の視点を明確にした地域との協働の取り組みは、子供に「学びと実社会の連結（リアルな学び）」を体験させることができる。子供が、自分自身の生き方を見つめ、将来を考え、能登に誇りと愛着をもてるようにするためには、地域との協働によるキャリア教育が有効であることを明らかにした。

I はじめに

1. 研究動機

今日、日本の産業や経済その他様々な領域において急激な構造変化が進行している。2015年8月に中央教育審議会教育課程企画特別部会から出された「論点整理」にも見られるように、我が国においては2030年がひとつの分岐点になると考えられている。未来に生きる子供たちが、社会の変化に対応しつつ自らの人生を切り拓き、たくましく生きていくためにどうすべきかを考えていかなければならない。「論点整理」に「子供の学びに向かう力を刺激するためには、実社会や実生活に関わる主題に関する学習を積極的に取り入れていくことや、前回改訂で重視された体験活動の充実を図り、その成果を振り返って次の学びにつなげていくことも引き続き重要である」とある。2020年に小学校で全面実施される新学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」「アクティブ・ラーニング」「カ

リキュラム・マネジメント」等が重要なキーワードとなっている。今後は、子供たちが「何を知っているか」だけでなく、「知っていることを使ってどのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」が問われてくる。また「論点整理」では、学校と社会の接続を意識し、一人一人の社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力や態度を育み、キャリア発達を促す「キャリア教育」の視点を重視することが示されている。

社会が高度化・複雑化していく中、学校だけで諸課題を解決していくことは難しくなっている。教員の多くは限られた職業経験しか持っていない。それでも、社会の変化やニーズに対応していかなければならない。そのためには、教育活動に必要な地域等の外部の人の力や資源を活用していくことが求められる。また、子供が地域の人々と対話をしていくことで「学びと実社会の連結（リアルな学び）」が可能となる。

キャリア教育における本校の現状をまとめると次のようになる。

- ・子供が学ぶ意義をしっかりと感じ取れていないのではないか。
- ・校外学習の際に各担任が自ら地域資源を探し出し連絡調整をしている。
- ・生活科・総合的な学習の時間などの活動をキャリア教育の視点でとらえなおす必要がある。
- ・地域と学校が気軽に意見を交流する場が設定されていない。

このように本校では地域と学校をつなぐためのシステムが確立されていないため、地域との連携・協働の活動は担任裁量に頼っている所が多い。キャリア教育充実のためには地域と学校が融合した組織づくりが必要と考え、「宇出津っ子地域協働会議」を立ち上げ実践を行うこととした。

2. 目的

地域と学校との協働によるキャリア教育の充実を目的とする。そのためには、地域と学校をつなぐための組織づくりを行う必要がある。本実践では、地域と学校が協働する取り組みとして、生活科や総合的な学習の時間におけるキャリア教育に重点を置くことにした。

コミュニティ・スクールは、学校を含む地域全体の活性化を目指す取り組みであると捉えると、その前段階の取り組みとなる。

II 研究の内容と方法

1. 研究の内容

(1) 地域協働会議の発足

地域との連携・協働を進めるために、地域と学校が話し合う地域協働会議を設ける。

地域協働会議では、主に次のことを話し合う。

- ・キャリア教育でめざす子供像について。
- ・キャリア教育のカリキュラムをもとに、どのような取り組みが出来るかについて。

- ・地域連携・協働の連絡調整・情報収集について。

(2) キャリア教育の充実

キャリア教育の充実のために、地域協働会議の意見をもとに次の取り組みを重視する。

- ・ゲストティチャーを招き、教室で仕事や生き方について語ってもらう。
- ・地域に出向きインタビュー取材を通して、仕事人の働き方や生き方について学ぶ。

(3) めざす子供の姿

子供が、夢や願いを実現する存在になることが究極のめざす姿と言える。ベネッセ教育総合研究所の調査（2016）によれば、「大学卒業後の進路に向けた準備・活動をいつ頃から始めたか」という問いに、「大学3年生の後期」という回答が、34.4%であった。もっと早い段階から進路を決めても良いのではないかとわたしは考えている。夢や願いを実現するためには、自分というものをしっかりと持った子供を育てることが重要である。自分とは、何者で何をを目指したいのかを早い段階から考えさせる経験が必要なのではないか。また、人格形成は、故郷での暮らしが大きく影響している。自分を創り上げたのは故郷という思いも持てるようにしたい。

「地域との協働によるキャリア教育」では、

- ・自分自身（自分自身の生き方）を見つめ、
- ・自発性（未来を切り拓く）を身に着けて、
- ・能登に誇りと愛着を持てる

子供の姿をめざしていく。

2. 研究の方法

(1) 概要

「宇出津っ子地域協働会議」を年4回開催する。そこで話し合われたことをもとに、各学年の生活科・総合的な学習の時間に重点をおいて、キャリア教育を実践する。地域との協働によるキャリア教育により、子供の「生き方を見つめる」「自発性」「地域志向」が高まったかを考察する。

(2) データの取り方

第1回会議から、すべての会議をビデオに記録し、地域協働の際にポイントとなる発言に着目して、それを参考にしたり改善の方策を考えたりしてリスト化する。

また、地域協働会議の意見をもとに、キャリア教育の実践を行い、子供にふりかえりを書かせて変容を記録していく。

さらに、委員や職員からの意見を集約して、地域協働会議の運営の仕方について改善点をまとめる。

Ⅲ 実践の概要と結果

1. 実践の概要

「宇出津っ子地域協働会議」の組織立ち上げからの経過と主に6年生のキャリア教育の実践について紹介する。

研究を始める前に、校長に数回面談の時間をとって頂き、地域協働の取り組みを行いたいことを話してきた。そして、会議を立ち上げる際に、委員の人数をどれぐらいにするのか、どのような人を選定すればよいのかを話し合った。地域協働のための組織づくりは、今回が初めてとなるため、取り組み内容を広げすぎると収拾がつかなくなると予想されたので、生活科および総合的な学習の時間でのキャリア教育に重点を置いた組織づくりにしたいと考えていた。

メンバー選定が、今回の取り組みの肝とも言える。心理学者の K.E.ワイク (K.E.Weick) によれば、組織づくりにおいて ルース・カップリング (loose coupling) が有効なのだそう。『個人の行動選択や価値観の自由度』や『物事に対する視点や解釈の多様性』が保たれているので、全体主義的な同調圧力や意見の強制によって『個人の気づき・発想・考え方』が無理矢理に抑圧されてしまうリスクが格段に低いとされている。このようなことが可能なメンバー選びができればと考えていた。本校は、3つの小学校が統合している。

(2007年に神野小学校、2012年に真脇小学

校を統合。) そのため委員は3地区それぞれから選び、地区のことをよく理解している人を候補にすることにした。組織規模は、外部の委員を5～6名とすることにした。人数が増えると、実効性が弱くなるのではないかと考えたからである。

キャリア教育の年間指導計画は、前年度までにできていたが、新年度に入り各担任に地域協働会議の発足にあわせて、地域協働によるキャリア教育の取り組みができないかを再検討してもらった。

第1回会議が、6月開催であったため、1学期には、地域協働会議の意見をキャリア教育実践の場に生かすことができなかった。第2回会議では職員の要望を伝え、会議で意見交換し、2学期の活動に生かせるよう職員へのフィードバックを行った。

2. 実践の経過 1

(1)「地域協働の会議づくり」プレ会議 1

実施日：2月13日(月)

参加者：校長・教頭・PTA会長・教務主任
地域協働担当

(概要①)

18:00より本校で行った。この会議を実施する前に、校長に何度か連絡を取り、この日にPTAの役員会があるので、役員会の開始前に時間を設定して頂いた。地域との協働による組織づくりを行いたい旨をPTA会長や同席した職員に説明を行い、PTA会長にも賛同して頂いた。地域には、学校に意見を言いたい人もいるだろうが、なかなか意見を交わす場所がなかったので、今回の取り組みには賛同できるとのことであった。PTA会長自身も学校と気軽に意見を交わせる場所があれば良いと考えていたとのことであった。学校として、子供には挨拶ができてコミュニケーションのとれる子になって欲しいとの思いがある事を話した。一通り説明が終わってから、役員会が始まるまで時間があつたので、地域のことについて、いろいろな話をして頂

いた。Iターンで能登に移り住んだ方の話、Nプロジェクト(金沢の学生が農業と日本酒、地域をつなぐ活動)を通じて地元の酒蔵に就職した大学生の話、地元で協力してくれそうな方の話などいろいろと出てきた。また、札幌にある「丘の上のクラーク」像の作者が能登町出身の坂坦道であることも教えて頂いた。わたし自身初めて聞いた話だったので、非常に興味深く聞くことができた。

19:00から役員会が行われた。(10人程度)役員会に先立ち時間を頂いて、次年度「地域との協働によるキャリア教育」を行いたい旨を説明させて頂いた。

(省察①)

地域協働を行っていくためには、地域からの声を聞けたり地域に学校の声が届けたりする場の設定は大事であると思った。わずかな時間ではあったが、地域にはたくさんの人の力や資源となるものが埋もれているのだという期待を持つことができる会であった。

(2)「地域協働の会議づくり」プレ会議2

実施日: 2月23日(木)

参加者: 校長、地域協働担当

(概要②)

15:00より本校で、行った。地域協働会議のメンバー選定について話し合った。事前にPTA会長と宇出津公民館館長には、メンバーとして参加して頂けることを了承してもらっていた。

今回は、校長と相談の上、高倉公民館館長、神野公民館館長、宇出津地区から候補となる方2名と姫・真脇地区からは本校の校務員でもある方をお願いすることを申し合わせた。27日に地区懇談会があるので、校長を通じて打診してもらうようお願いした。

15:30より教務主任と打ち合わせを行った。外部に説明する資料で、「学びの活動でつきたい力」の具体的な要素の後ろに、「人間関係形成・社会形成能力」など基礎的・汎用的能力の何をねらったものかを示すことを

確認した。

(1) コミュニケーション能力

(人間関係形成・社会形成能力)

(2) 前向きに考える力

(自己理解・自己管理能力)

(3) 課題に対して主体的に取り組む力

(課題対応能力)

(4) 自分の果たすべき立場や役割について考える力(キャリアプランニング能力)

教務主任からは、企業研修に参加した際の話聞いた。企業においても成功の秘訣は、人間関係にあるということであった。

また、次年度の取り組みで海洋教育の一環として、地域の方に干物づくりを習ってはどうか、地域の造り酒屋と協働して、発酵の仕組みや流通を調べたりラベルのデザインづくりをしたりといろいろ学べるのではないかと話し合った。

(省察②)

地域協働会議のメンバー選定が、本実践の肝になると考えていた。今回、候補にあげられた方たちは、学校に大きなエネルギーを呼び込むものと期待できる。教務主任との打ち合わせでは、実践のいくつかのアイデアが出てきた。様々な立場から複数の意見を取り入れることで新たなアイデアが生まれると再認識できた。

(3) 第1回職員会議

実施日: 4月3日(月)

参加者: 全教職員

(概要③)

第1回職員会議で、配付資料をもとに、生活科・総合的な学習の時間を中心として、地域との協働によりキャリア教育の充実を行いたいことの説明を行った。校務分掌でも「地域協働担当」として位置づけをして頂いた。

(省察③)

地域との協働によるキャリア教育の実践については、賛同してもらえた。今年度は、「宇出津っ子地域協働会議」が初年度であること

から協働での取り組みは、生活科・総合的な学習の時間でのキャリア教育に重点を置き、広げすぎないことを確認できたのは良かった。

くめずす子供の姿>

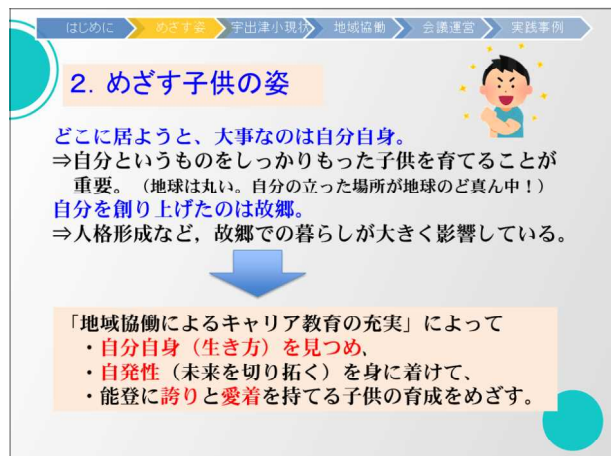


図1 職員会議配付資料1

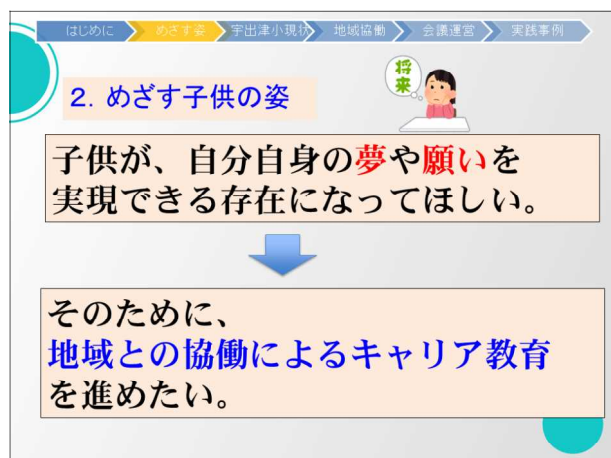


図2 職員会議配付資料2

（４）第1回宇出津っ子地域協働会議

実施日：6月5日（月）

参加者：地域協働会議委員

（概要④）

委員は、3地区の公民館長3名、地域の方2名、PTA会長、校長、教頭、教務主任、地域協働担当教員2名の11名となった。

地域の方は、2名である。宇出津地区の方は、これまでスポーツ少年団に30年以上関わっている。ドイツの少年団やスポーツ事情を視察された経験もある。また、地域の行事

にも積極的に参加している。

もう1名は、姫・真脇地区の方であり本校の校務員でもある。少年野球のコーチ、祭の絵師、地元の人たちとダンスチームを結成するなど幅広く活躍している。

第1回目なので本校の現状、地域との協働で行いたい事など、地域協働会議を設けた目的と年間行事計画を説明して理解を求めた。

会議では、次のような意見が出された。

＜公民館長＞地域連携・協働が、大事なことは理解できた。今までも先生方は、地域に出て子供たちに学習をさせる機会はあったと思うが、なぜ今改めて地域連携や協働が必要なのか。

＜地域協働担当A＞キャリア教育の充実を考えたとき、地域連携や協働は欠かせないものとなる。これまでの実践をキャリア教育の視点からとらえ直す必要がある。学ぶ意欲向上のためにキャリア教育を充実したい。そのために地域連携・協働により学びと実社会の連結を行いたい。

＜公民館長＞地域の人に力を借りることは、結構なことである。しかし、教員が学習（授業）の楽しさを伝えることをもう一度とらえ直してほしい。体験談として、中学生の時は、地理の授業が大好きであった。高校生になって、地理が大嫌いになった。ただ、今でも基本的には地理を学ぶことは好きである。中学生の時と高校生の時の差はどこで生まれたものなのか。「説明する人の上手さで、参加者の意欲が変わる」のではないか。教員としての力量をあげることも大事である。

＜地域協働担当B＞地域の人材を活用するには、まず教員が自ら出向いて、いろいろと聞きに行く必要がある。教員自身が、地域の人に魅力を感じなければ子供たちに魅力を伝えることはできない。

＜委員A＞能都中学校（宇出津小学校の進学先）の海外ホームステイの参加者が能登町の他の中学校に比べて少ない。小中連携を行い

中学生が小学生に体験談を話す場を設ければ、その魅力が伝わり参加者が増えるのではないか。

＜委員A＞人材育成研修で、高校生が職場にやってくる。ある高校生は、医療事務をめざしているとのことであったが、職場体験の場として、やなぎだ荘を選んだ。どんな職業に就く場合でも仕事に共通する部分はある。どこで体験しても何かしら得るものはあるはずであるが、選択理由が「家から近いから」では弱い。このような現状からもキャリア教育の必要性を感じる。

＜地域協働担当B＞学校職員が、公民館に自由に出入りできる存在でいてほしい。そうすることで、いろいろな情報が得られる。ある小学校では、バスの待ち時間を利用して、放課後子ども教室を開いている。教養文化館（公民館）と協働して行っている。（茶道教室、手芸）人形劇など）

＜地域協働担当B＞地域の人たちも学校の役に立ちたいと思っている。学校からの一方通行ではなくて、地域の方たちの自己実現の場になれば地域からの人材がどんどん学校にも入ってくるはずである。

（省察④）

会議は、1時間の予定であったが30分延長することになった。全委員の方から、貴重な意見をもらえたのは良かった。地域には、たくさんの人材や資源があるのに、教員が生かしきれていないと感じた。前半に、わたしが取り組み概要の説明を行った。使用する用語は、教育業界の用語ではなく、伝わりやすいものに言い換える必要があると感じた。「キャリア教育」とは、社会的・職業的自立に向け「生きる力」を身につけるための教育であると説明した。しかし「キャリア」≒「仕事」の印象が強く、中学校での職場体験の小学校版をイメージされた方もいたようであった。場合によっては、キャリア教育ではなく「生き方教育」など言い換えも必要かもしれない。

第1回の開催が6月と遅かったため、1学期のキャリア教育の実践では、各委員の意見を十分に生かすことができなかった。



図3 第1回宇出津っ子地域協働会議

（5）宇出津っ子地域協働会議委員との面談

実施日：6月7日（水）

参加者：第1回会議に参加できなかった委員
校長、地域協働担当

（概要⑤）

第1回会議に参加できなかった委員の方がいたため、時間を頂いて概要説明を行った。

次のような意見が出された。

- ・リアルが大事である。実体験をさせる必要がある。いろいろと経験させないと、身につかないものがある。
- ・まわりに物がそろいすぎていて子供は不足を感じていない。足りない中でどうするかという経験をさせる必要がある。
- ・30年以上スポーツ少年団に関わってきている。スポーツ少年団は、勝ち負けよりも人格形成を目的にしてきたはずである。スポーツ少年団に限らずいろいろな場面、学習面でも、勝利至上主義に傾いてきている。もう一度、スポーツ少年団を行う意義をとらえなおし共通理解を図る必要がある。
- ・学校に地域人材を取り入れて学習を進めることは大事である。地域には、人材があふれている。掘り起こしが必要である。学校の教員は、積極的に聞いてほしい。

（省察⑤）

30分ほどの面談であった。実体験やリア

ルという言葉聞いてキャリア教育を行う上でのキーワードになると感じた。「地域には、人材があふれている」との言葉に、地域協働会議を行う意義と期待を感じることができた。

（６）第２回宇出津っ子地域協働会議

実施日：８月１０日（木）

参加者：地域協働会議委員

（概要⑥）

第２回会議を行うにあたり、事前に各担任等にどんなサポートを希望するか集約を行った。会議では、１学期のキャリア教育の実践の振り返りと２学期の取り組み予定について報告した。１１月に３年生から６年生が総合的な学習の時間で学んだことを各人がプレゼンテーションソフトを使い発表する。６年生は、「能登町の仕事人の生き方を知り、能登町の再発見をする」ことを通して、今の自分自身の生き方やこれからの自分自身について考える実践をすることにしていた。委員の方から子供が取材に行く前に、高校生など年齢の近い人から取材で、どんなことを学べるのか体験談を話してもらってはどうか、それから行くと学びに深まりが出るのではないかと意見を頂いた。実際に、高校生から話を聞くことはできなかったが、高校生が制作した能登で働く人のビデオ（メディアキャンプ in 能登町）を観せることで子供の取材に対する意欲が高まったように感じた。また、各学年から出てきた要望についても委員の方からたくさんアイデアを頂けた。

会議では、次のような意見が出された。

＜公民館長＞資料館では、昔の道具を展示してあるが触ることは難しい。学校の学習で、昔の道具を体験することを前提に地区の人から、昔の道具の寄付をお願いしてはどうか。例えば、長い鋤や七輪など納屋にそのままあるのではないかな。

＜委員Ａ＞酒づくりは、従来男性が行ってきた。鶴野さん・金七さんなど女性で酒造り

に取り組んでいる方もいる。女性の視点からどのように文化を伝えていくのか話を聞いても良いのではないかな。

＜委員Ｂ＞高校生がメディアキャンプで、３分間の能登町の仕事のＰＲビデオを制作した。高校生の視点から小学生に伝えるというのも新しいスタイルになるのではないかな。小学生が実際に働いている人の話を聞くことも大事だが、年齢の近い高校生の視点から話を聞くことで伝わるものがあるのではないかな。

＜委員Ａ＞「子供たちに、いろいろな体験をしましょう」と言いながら、「子供だけではだめですよ、保護者同伴で行ってください」と言っている。「あれもだめ、これもだめ」と言って、子供の行動範囲をせばめているのではないかな。学校では、危ないことはさせない。みんなが大体できる所までしかやらせていない。力を限界まで出させて、ぎりぎりの所までやらせないで、本当の体験にはならないのではないかな。「甘柿と渋柿の判断」や「サザエとり」などは、実際に体験しないとわからない。今の子供たちは「遊びとしての自由がない」現在では、何かお膳立てをしてやらせないで何もできない。子供の本当の体験は難しくなってしまうている。季節ごとに季節の物事をやらせることも大事なのではないかな。

＜委員Ｂ＞キャリア教育は、将来に向けての職業観を持たせることがねらいなのではないかな。１学期の取り組みを見ると、例年の取り組みと変わらないように思う。新たに取り組んだことは、どんなことがあるのかな。

＜委員Ｂ＞１学期・２学期の取り組みを見ると、伝承文化と職業への意識の植え付けが並行して進んでいるように見える。取り組みをもっと絞り込む必要はないかな。最終的な目的が何なのか曖昧になっている。

＜委員Ｂ＞将来、職種・業種も減っていくそんな中で、自分のなりたい職業を明確に持たせることで、将来しっかり職業についていくということが、ねらいだととらえていた。

＜委員B＞伝承文化を学ぶことで、比較材料をそろえ、子供の考え方をふくらませるのか。いろんな職業を見せたり聞かせたり体験させたりすることで、自分のなりたいもの、将来の夢を持たせていくのか。

＜委員B＞中学校のわくワークや高校の職場体験のようなものを小学校の段階でもさせたいのか。小学校では、そこまで具体的なものではないのか。

＜委員B＞将来の仕事を考えさせる時には、1年生から系統性を持って、段階的に学ばせるとよい。大学生になって、「何をすればよいのかなあ」ではなくて、早い段階で何をすればよいのか、何を勉強すればよいのかを意識づけをする取り組みだと思っていた。

＜地域協働担当A＞段階的なカリキュラムを作るとよい。人としての成長も含めて、1年生からの系統的なカリキュラムを作れるとよい。

＜地域協働担当A＞「キャリア教育」＝「職業教育」とは捉えていない。人としての生き方について考えること。基礎的汎用的能力を身につけることが大事だと考えている。

＜校長＞ この会議は、人材発掘とキャリア教育の取り組みが混在している。つけたい力を明確にしてから取り組むことを意識しないといけない。

＜公民館長＞ごみの流れを教えてもらいたい。ごみは、生活していく上で無視できないものである。どのような流れで、処理されているのかを知ること社会の仕組みも見えてくる。

＜委員A＞施設見学に行くのはよい。子供たちの中に施設見学に行った後ごみの分別の意識がないものがある。見学の後に、自分たちが何をすべきかを考えないといけない。子供たちに、ごみの分別を確実にさせるなど、小さいことから積み重ねていかなければならない。

＜委員A＞昔は、年齢に応じて子供たちも

家庭の中で仕事・役割が与えられていた。今は、それがあつたのだろうか。

（省察⑥）

会議を進めていく上で、「キャリア教育」とは、何かについて委員の中で共通認識が必要であると感じた。「キャリア教育」＝「職業教育」との捉えではないが、職業教育と捉えられてしまいがちである。そうならないためには、「本校のキャリア教育は、これです」と言えるカリキュラムが必要になってくる。現在あるカリキュラムは、『能登町の「人、もの、こと」』となっているが、学年ごとのつながりは弱く系統性があるものとはなっていない。そのため委員から、キャリア教育に関する質問が多く出されたと思われる。



図4 第2回宇出津っ子地域協働会議

（7）第3回宇出津っ子地域協働会議

実施日：11月24日（金）

参加者：地域協働会議委員

（概要⑦）

総合的な学習の時間の発表会の様子のふりかえりを行った。また、これまでの会議の内容等について、委員からの意見と職員からの意見を紹介した。

＜委員からの意見＞

- ・大綱的な段階からの委員個々の意見集約よりもっと踏み込んだ具体的な“とんがり”をテーマとして提起し、それに基づいての意見を求める形の方がスムーズに議事進行できるように感じる。

- ・学年毎の単独プログラムではなく、低学年から高学年までがリンクした、段階的プログラムの取り組みが必要だと感じる。
- ・地域協働会議の委員だけではなく、担任・担当者も含めた全体での相互理解が必要だと感じる。
- ・今までの取り組みが自分の子供の頃は、毎日の生活で当たり前にあった。地域活動であった事が、学校で取り入れられて学習していくことになっているのがよくわからない。いかに人との交流がないのかの表れであると実感する。中身はともあれ不思議な気持ちです。
- ・具体的な取り組みにならないようなものでも提案してもらえれば、各委員からアドバイスできるものもあると思われる。

＜職員からの意見＞

- ・地域協働会議が行われていることは、知っているが実態が見えづらい。
- ・第1回・第2回と会議終了後に資料を添えて各職員に報告していたが、うまく協働会議と職員をつなぐことができていない。

会議では、次のような意見が出された。

＜公民館長A＞各公民館・地域も子供が、行事に参加してくれることを望んでいる。学校からの働きかけがあれば参加者も増える。

＜職員＞学校は、これ以上新しい取り組みをはじめるとは物理的にもできない。既存の学校の取り組みをどのように、地域との活動につなげるかを考えなければならない。

＜公民館長B＞総合の発表会の参加者が少ないという意見があった。人を集めたければ、それなりの仕掛けをする必要がある。土曜日に開催する。ポスターを貼り地域にも知らせる。「宇出津小学校に、たまには来てみんないね」などの声掛けも必要である。地域の方は、本当に行ってよいのかどうかの迷いもあるのではないかな。

＜職員＞子供は親や教員以外の人から言われる意見だと新鮮で聞き入れられる。「挨拶が

大事」であることを街の人に言われると受けとめ方が違う。子供は、しっかり聞き、やはり大事なのだと思うようになる。

＜地域協働担当A＞働く人の生き方や考え方にふれて、子供は、「かっこいい大人」という表現を使っていた。

＜地域協働担当A＞ためになる話をしてもらっても、消化しきれない子供もいた。学校に戻ってから、仕事人の思いを話してあげる必要がある。

＜公民館長A＞かなりの時間をかけて、プレゼンテーションをつくるが発表の場が少ないという事であれば、公民館祭りでの発表をしてはどうか。公民館では、子供たちの発表の時間を設定するので、遠慮しないで言ってもらえるとよい。

＜公民館長B＞地域が一丸となって楽しめるもの。小学校の運動会に地域の人たちが、1種目でも2種目でも入れるような運動会にできないか。町民大運動会になってから、各地区の参加者が減っている。

＜公民館長B＞公民館行事で集客のためには、子供が大きな力となる。学校も協力してくれると助かる。

＜職員＞公民館や地域の協力が得られることは、とてもありがたい。ただし、何かをやるにしても別日だと子供が複数回行うことになり負担感につながる恐れがある。同日開催にして公民館と学校が協力できればすばらしい。

＜職員＞クラブ活動で、地域の力を借りたい。現在は、「ごいたクラブ」（地域のテーブルゲーム）の指導をして頂いているが、もっと広がりを持っていけたらと考えている。

＜職員＞学校としては、地域の方に学校に来てもらいたいとの思いはあったが、今後はアピールの仕方を考えて、積極的に呼びかけていく必要がある。また公民館を利用して、子供たちの発表の機会を増やすことも取り組んでいきたい。

＜委員A＞キャリア教育の充実をするためには、議論の柱となるものを示してもらい、それについて話した方が、議論が深まる。宇出津小学校としてキャリア教育の柱をどうするのかを今後決めていければよい。そのためには各担任からの意見をもっと吸い上げて、相互理解をしていけるとよい。

＜公民館長B＞本当に学校として、地域の人に見てもらいたいのなら、やり方はたくさんある。本当にやる気であるなら、町内会長あてに回覧板を出すなどして、「おじいさん、おばあさんぜひ、今の子供の姿を見てやってください」とすればよい。

＜公民館長A＞公民館祭りで、公民館から要請すると保護者や子供が遠慮しがちになる。学校からも後押ししてもらえると、公民館祭りが華やかになる。また、学校が子供たちに発表の場を提供したいというのであれば、公民館としてもその時間をつくります。

＜委員A＞外からの情報をたくさん与えてあげることで子供の視野が広がる。

＜公民館長B＞思い切って、ポスターを貼らだして、「宇出津小学校にたまには顔だしてみんかい」ぐらいにやってみてはどうか。地域住民は、行ってよいのかどうか迷っている状態である。（学校は、地域の人にいつでも来てくださいという姿勢であるが、地域の人には認知されていない。）

＜職員＞新たなものをつくるのは難しいので、今のものをどう充実させるかを考える。
＜委員A＞たくさん関わりを子供たちに与えることで子供たちの感じる部分が増えていく。地域の方とお会いする機会をつくってあげればよい。

＜公民館長B＞昔は、子供の縦社会が自然に形成されていた。それに代わるのが総合的な学習の時間になるのではないか。

＜委員B＞生きる力、自分を守るための資源はその場に行かないと分からない。体験しないと分からない。何になりたいと言わせるだ

けでなく、体験もさせないといけない。そういうヒントを総合的な学習の時間で与えてほしい。

（省察⑦）

各委員からの意見を伺うと、とても協力的であると感じることができた。委員からの意見にもあるように今年度は宇出津小としての特徴的な取り組みができていない。地域協働会議の中で、具体的な取り組み案を提案できるようにしたい。これまで3回の地域協働会議を行い、委員の方からたくさんの意見を頂くことができた。地域協働を行っていくための素地は十分にあると感じることができた。今後は、学校全体でのキャリア教育のカリキュラムを整えていくことで、地域協働によるキャリア教育が進むと考えられる。そのためには、地域協働会議の委員だけでなく、他の職員にも活動内容が見えるように、資料を配付するだけでなく、地域協働会議に参加してもらうなど動きが見える方法を提案していかなければならない。

また、地域の方に、学校を知ってもらうためには、積極的なアピールが必要だと感じた。



図5 第3回宇出津っ子地域協働会議

3. 実践の経過2

「宇出津っ子地域協働会議」での意見を参考に、生活科・総合的な学習の時間に重点をおいて、キャリア教育の実践を行った。ここでは、6年生の実践の紹介と3年生から6年生が行った「総合的な学習の時間の発表会」

の参加者の意見を紹介する。

（１）６年生の実践

（概要⑧）

６年生は、「能登町の仕事人の生き方を知り、能登町の再発見をする」ことを通して、今の自分自身の生き方やこれからの自分自身について考える実践である。

１学期は、個人で興味のある職業を調べて、Ａ２版の壁新聞にまとめた。書籍やインターネットを主な情報源として調べ学習を行った。壁新聞をまとめる際に、資格の取り方や適性、待遇面などいくつかの調べる項目を指定した。また、仕事の良い面、楽しい面だけでなく、大変な面も調べるようにした。

調べた職業は、以下のものであった。

薬剤師、漁師、プロ野球選手、アパレル店員、YouTuber、保育士、理容師、特撮スタッフ、パティシエ、歌手、ＮＢＡ選手、トリマー、漫画家、グラフィックデザイナー、県職員、診療放射線技師、バスケットボールの監督、テレビプロデューサー、バリスタ、警察官、海上保安官、フラワーデザイナー、翻訳者、大工

子供たちが、興味をもった職業を身近にやっている方がいない場合もあり、書籍やインターネットからの情報に頼ることが多く、作業的になってしまい、子供が意欲を持続して学習に取り組むことが難しかった。

２学期は、能登町で実際に働いている人を取材して、「仕事人の生き方を知り、能登町を再発見する」ことをテーマに取り組んだ。今回は、子供自らが取材先を選び、取材交渉をするところから始めた。班は、２人～７人となった。各班の人数はそろえなかった。

各取材班に、取材先で必ず聞く共通の質問項目を決めた。

- ・なぜ、この仕事を選んだのですか。
- ・なぜ、能登町で仕事をしようと思ったのですか。
- ・能登町の魅力とは、どんな所ですか。

- ・能登町を石川や全国に向けて、アピールするために何か工夫をされていますか。
- ・将来働く際に、小学生のうちに身につけなければならないことがあれば教えてください。

以上のことを共通の質問として設定した。また、取材前に、こちらから仕事に対する考え方や生き方、能登に対する思いを語って欲しいとお願いをしておいた。

取材先は、以下のものであった。

取材先、事業内容
仕事人の紹介
①居酒屋ゆきちゃん、飲食店
昼も営業。定食はおいしいと評判。地産地消を考え、地元の食材を使い料理を提供している。
②パルフェ、軽食・喫茶店
金沢で料理人をしていた。能登町におしゃれな喫茶店がなく、喫茶店をやりたいという思いから開店した。
③いか屋さん（石川県いか釣生産直販協同組合）、イカの加工・販売
先代社長が漁師をしていた。先代が、東京で鮮度の落ちたイカが店に出されているのを見てショックを受けた。漁師が命がけで獲ったイカを新鮮なまま消費者に届けたいという思いから会社を設立した。現社長は、先代の思いを守るために会社を引き継ぐ。
④ PEACE（ライダーハウス）、ライダーハウス・カフェ
金沢出身。小さい頃から能登町の自然や雰囲気にあこがれていた。２年半かけて現在の物件を見つけた。宣伝広告費は一切使っていない。SNS等の口コミのみ。現在 google などの検索サイトで「ライダーハウス」と入れれば、TOP に出てくるまでになった。
⑤マルガージェラート、ジェラート販売
実家が酪農をやっていて、牛乳の消費を増やしたいとの思いから店を始めた。能登の食材を使用したジェラート。現在は、夏場

1 日平均 100 人訪れる。今年イタリアのシャーベフェスティバルで世界一になる。

⑥能登屋、古民家和食料理店

愛知県で住宅販売会社を経営していた。魚釣りが趣味。能登町の風土と魚にほれ込み能登町に移住。能登の魚や食材のおいしさを知ってもらうために、和食料理店を開いた。廃線の駅に桜を植樹しようと計画するなど、地域活性化も考えている。

⑦いわずみ、和菓子店

いも菓子で知られる能登町の菓子店。夏場に、あんを使った菓子は売れ行きが悪くなる。従来の設備を活用して夏場でも売れる商品をと考えて、ワッフルを販売。現在、ワッフルは年間 100 種類以上販売。県内外だけでなく、香港・シンガポール・台湾でも販売している。

⑧宇出津総合病院、放射線科

放射線科に勤務。MRI やレントゲンの仕組みや操作、能登町の医療現場の現状を子供にわかりやすく解説して頂いた。

⑨あおぞら薬局、調剤薬局

金沢から地元に戻り薬剤師として勤務している。薬剤師をめざした理由や薬剤師の役割、歴史を子供にわかりやすく解説して頂いた。

⑩ひばり保育所、認定子ども園

地元出身である園長から、将来保育士をめざしている子供に、保育士のやりがいや気をつけていることなどを話して頂いた。

3 学期は 2 学期で学んだことをもとに A 4 版で、一人 4 ページ以内のパンフレットを制作し、それを冊子にまとめ、公民館等に展示してもらう予定である。

(省察⑧)

子供が、実際に働く人の姿をみて、その人の生き方や考え方を聞く体験は貴重であった。取材先の方には、事前に何を語ってほしいのかを打ち合わせしておくことが重要である。取材先の方は、必ずしも話に慣れて

いる人ばかりではないので、子供に何を学ばせたいのかをしっかりと伝える必要がある。



図 6 マルガージェラート



図 7 宇出津総合病院放射線科

(2) 総合的な学習の時間の発表

(概要⑨)

1 1 月初旬に、1 日目 3・4 年生、2 日目 5・6 年生と 2 日間にわけて総合的な学習の発表会を行った。一人ずつプレゼンテーションの資料を作成して、発表 6 分、質問 2 分の合計 8 分間で調べたことを発表した。

<発表後の子供の意見・感想>

・「発表を聞いて、元気になった」と言ってもらえた。「新商品を開発すること」や「祭りの時に屋台を出せばよい」という提案を会社に持ち帰って話してみると言ってもらえてうれしかった。

- ・マルガージェラートは食べたことしかなかったけど、いろいろな工夫をしている事が、わかったと言ってもらえた。
- ・「ずーっと能登に住みたいですか？」と聞かれたけど、しっかりと自分のしたいことについて話して返すことができたので良かったです。
- ・マルガーの社長の太造さんのご両親と仲の良い人が太造さんの小さい時のことを話してくれたことが一番印象に残っています。

<参加者の意見・感想>

見学先企業等

- ・どんな思いで仕事をやってきているのか思いをくみ取って発表してくれて、うれしい。仕事にやりがいを持てる。提案してくれたことを会社に持ち帰りたい。
- ・子供達が、楽しく学べる施設を目指したいと思っています。
- ・参加者の方からマルガージェラートの当時の様子を感想とともに聞かせて頂いた。「柴野さんは工夫と努力次第で、能登にいても勝負できることを証明してくれた。皆もがんばってほしい」と話されていた。

保護者

- ・将来の夢だと話している子がいました。すごく良いことだと思い感心しました。
- ・これからの仕事ではプレゼンテーションの能力は大切です。とても良い発表会でした。
- ・3年生の時から今年で4回目。皆、資料の作り方も機器の操作も話し方もとても慣れた感じで余裕のある雰囲気でした。じっくりと、自分の住む町について調べたり考えたりする機会がある事は地元を思い大切にする気持ちを育むと思うので、今後もこの取り組みと発表会を続けてほしいです。
- ・親以外の職業について深く知ることができたり地域の産業についても理解を深めたりできると思います。他の子供たちの発表を聞いて今後の職業観等につながっていったらいいなと思いました。

- ・子供たちが地域を知ることができて大変良い。能登町の商品を調べていて良いと思います。

- ・発表を聞いて、自分の知らないことを知ることができて勉強になりました。

(省察⑨)

総合の発表に向けて、子供たちは自分の調べたことをいかに分かりやすく発表するかを考えていた。聞き取りやすい声の大きさや目線など取り組み姿勢に関わるものだけでなく、動画や音楽も活用していた。発表の際、子供が参観者とのやり取りをする中で、調べたことを認めてもらえる発言をもらえるとやはりうれしいようである。肯定感の高まりとともに、学習に向かう意欲にもつながると思われる。また、このような取り組みを続けていくことが、地域の方に学校の取り組みを知ってもらい協働的取り組みを行うための機会づくりにもなることがわかった。

(3) 6年生実践の子供によるふりかえり

(概要⑩)

これまでの学習を通して、仕事に対する考え方や能登町に対する思いに変化があったかをふりかえってもらった。

- ・最初は、仕事は自分のためだけにやるものだと思っていたけど、仕事をするという事はみんなのために何かをする、助けるために仕事をするというふうに考え方が前と変わりました。
- ・プロ野球選手になることまでしか考えていなかったけど引退した後の仕事のことも考えて、引退した後も仕事をするために大学に行く道もあると考えるようになった。
- ・仕事をやる時は、子供の時から考えなくていいと思っていたけど、ピースの大場さんの話を聞いて、「気合いと根性」を身につけることが大事と思うようになった。
- ・今まで仕事など自分の未来のことは、あまり考えていなかったけど、今はちゃんと夢をもって努力する気になった。

- ・これまで仕事をしてみたい、それだけしかなかったけど、今は仕事とは何のためにするかなども考えられるようになりました。
- ・仕事をする事は、生活のためだと思っていたけど、仕事をする事自体が難しいと分かりました。だから、努力すること、真面目に取り組むことをしてから自由な時間をつくりたいと思いました。
- ・最初は、仕事はお金を稼ぐことだけだと思っていたけど、いろいろなことを調べたり見学したりして、仕事はいろいろな人の役に立ったり笑顔にしたりするためにあるのだと考えるようになった。
- ・これまで自分のやってみたい仕事、収入の安定している仕事などに興味があったのですが、能登屋のように地域のためにする仕事もある事を知った。なかなかできないことだと思うのですごいと思った。
- ・仕事をしている人は楽じゃなくて、いつもどこかで努力しているのだと思った。
- ・ぼくは野球のことしか興味がなかったけど能登屋を調べたら将来、飲食店を開きたくなった。ぼくは、どっちも努力したい。
- ・前までは、仕事は根気強くやれば続けられるだろうと思っていたけど、放射線科の人たちの話を聞いたら目標を持っていないと無理と言っていたので、仕事に対する考えが変わりました。
- ・最初は、こんなものも売っているんだなとしか思わなかったけど、ひとつの売り物も大切にあつかいながら作っていることを知ってすごいなと思いました。
- ・はじめは、自分達が生きていくためだけに仕事をしているんじゃないかと思ったけど1学期と2学期にいろいろと調べてみて、人は自分のためだけに生きていないんじゃないかと、大切な人などのためにも働いていると考え方が変わった。
- ・最初は、金のためだけに働いていると思っていたけど、人のために働く人もいたので

かっこよかった。金のためだけに働いている人もいると思うけど、人のために働く人の方が、かっこいい。(バイク好きや旅行好きな人のため)

- ・仕事をするには、いろんな努力が必要だと思いました。人とのコミュニケーションの力や学力・知識が必要になるのだなと思いました。

(省察⑩)

ふりかえりの感想から、「何のために働くのか」について、子供の考え方に変容が見られた。働くことは、収入を得るためだけではないという気づきがみられた。また、仕事人の生き方にふれることによって、自分の普段の生活を振り返ったり将来の自分について考えてみたりする子供もいた。この考えの変容が、どのように行動に現れるか、今後も見ていきたい。

第2回会議の提案を受けて、「高校生から仕事に関する話を聞く」ことを行ってみようと思ったが日程調整ができず、高校へのアプローチも行えなかった。そこで、メディアキャンプで制作されたビデオを視聴してから、子供たちに見学先を決めさせた。一つの班が、メディアキャンプで紹介されていた「PEACE」に興味を示し、そこを取材先にすることができた。

親や教員とは違う大人の方から、話を聞いたことは貴重な体験となったようである。また、見学先の方たちは、「能登に住んでいる人たちは、能登の良さをわかっていない」と話されていた。子供が、能登の魅力について話を聞くことで、地域の魅力を再認識したようである。見学先では、いずれの場所でも、とてもためになる話をして頂けた。しかし、その話を十分に消化しきれていない子供もいた。見学後に、大人も交えて、子供たちで十分なふりかえりの時間を持つ必要があった。

6年生では、見学先を子供の希望により決めた。10箇所となったために、引率や時間

の調整にかなり苦労した。自動車の手配が必要な見学先もあった。効率化のためには、見学先を絞ることも考える必要がある。

Ⅳ 考察

1. 地域協働会議の実践

今回、「宇出津っ子地域協働会議」を行うことで地域とのつながりを持つきっかけをつくることができた。委員選定にあたり前年度から校長と繰り返し打ち合わせを行った。委員の方たちは、地域を理解していて学校にも協力的であった。毎回の会議を真摯に受け止め率直な意見を言って頂けた。委員は最適な方を選ぶことが出来た。学校の取り組みを話しあう中で委員の方から様々な意見を頂き、これまでにはなかった視点を実践に取り入れることができた。会議を進める中で学校が地域の力を求めているだけでなく、地域も学校の力を求めている事がわかった。今後は、年間行事をすりあわせて行事の共同開催なども検討していきたい。会議では、教育業界用語を出来るだけ使わないようにすることが大切である。一般的に「キャリア教育」というと「職業教育」と直結したものと受け取られがちである。「キャリア教育」の呼び方を「生き方教育」とすると、よりねらいが伝わりやすい場合もある。会議では「具体的な取り組みの共有化がされないと行動に結びつきにくい。議論の柱になるものを出してもらえると議論が深まる」との意見があった。今後は学校全体でのキャリア教育のカリキュラムを整えていき、本校のキャリア教育の柱になるものを示したい。地域には、たくさんの人材いて資源もあり協力依頼をすれば力になってくれることがわかった。これらを掘り起こし、学校とつなげていくこともこの会議の役割のひとつである。網藤（2009）は「連携した活動に参加する人が、自らの動機づけで動くようなつながりに対する納得感」が必要としている。連携・協働を行うには協力者に負担感

を持たせないこと、納得感を持ってもらうことが大事である。今後、どんな人材がいてどんな資源があるのかをリスト化していく。そうすることで、地域協働会議での話し合いがより円滑になる。

地域協働担当職員以外の職員と地域協働会議のつながりは弱かった。会議の存在はもちろん認知されてはいたが、どんなことをやっているかまではわからない部分があったようである。地域協働担当ではなくても会議に出席する機会を設けて、取り組みの様子を知らせ、職員全員が積極的に活動に参加できる体制を整えていく必要がある。

「宇出津っ子地域協働会議」では委員の方々に真摯に意見を述べて頂いた。学校をより良いものにしたいという熱意が伝わってきた。地域協働を行っていくための素地は十分にある。今後も地域との協働によるキャリア教育の充実をめざしていきたい。

2. キャリア教育の実践

地域協働会議の委員の意見を参考にして、キャリア教育の実践に新たな視点を取り入れることができた。地域に出て地域の方から学ぶことは、保護者や教員とは違う大人の意見を聞けるので、その意義は大きい。一例として、働くために必要なことは「挨拶の大切さ」であると話す地域の方が多くいた。子供たちは、そこから挨拶の大切さを再認識したようである。地域に出ることで、規範意識や社会性の大切さを学ぶことができた。地域の方の働く姿をみたり生き方、考え方を聞いたりすることは子供にとって貴重な体験となった。中には「カッコいい大人」「あんな大人になりたい」と表現する子もいた。地域に出ることで、自分の将来をモデリングすることもできる。書籍やインターネットにはないリアルなものを通して自分の今後の生き方を見つめることができる。本実践では、地域志向の高まりもめざす子供の姿とした。自分の生まれた場所に、ただ住んでいても好きになること

はない。自分の生まれ育った場所がどんな所なのかを自分の目でみて体験しないと判断はできない。今回は地元でずっと住んでいる方だけでなく、移住された方にもお話を聞く機会があった。その方たちが、なぜ能登の地を選んだのかを聞くことで新しい発見があったようである。子供たちは能登の良さを改めて感じる事ができたようである。子供たちには、自分を育んだ土地を肯定的にとらえられるようになってもらいたい。

キャリア教育の実践後の子供のふりかえりから自分の生き方を見つめ、自分の将来を考えようとする意欲の高まりがみられた。また総合的な学習の時間の発表では取材してきたことをもとに、子供一人一人が能登の魅力についても発表することができた。

今後、さらに地域との協働を進めて子供が学ぶ意義を感じ取れるキャリア教育の実践を展開していきたい。

V 結論

本研究は、地域との協働によるキャリア教育の充実を目指した実践であった。そのために、地域と学校が融合した組織づくりを行った。地域協働会議を立ち上げたことにより、教員だけでは得られない様々な新たな視点が得られた。地域との協働を進めていくことが、キャリア教育の充実につながる事が示唆された。

引用・参考文献

- (1) 文部科学省 (2016) 『地域と学校の連携・協働の推進に向けた参考事例集』
- (2) 中央教育審議会教育課程企画特別部会 (2015) 『教育課程企画特別部会 論点整理』
- (3) 国立教育政策研究所生徒指導・進路指導センター (2015) 『「キャリア教育」資料集－文部科学省・国立教育政策研究所－研究・報告書・手引編[平成 26 年度版]』
- (4) 文部科学省 (2011) 『小学校キャリア教育の手引き (改訂版)』
- (5) 日本商工会議所 (2013) 『商工会議所キャリア教育活動白書』
- (6) 日本商工会議所 (2015) 『商工会議所キャリア教育活動白書 Vol.2』
- (7) ベネッセ教育総合研究所 (2016) 『第 3 回 大学生の学習・生活実態調査報告書ダイジェスト版』
- (8) 『新教育課程ライブラリ Vol.5 学校ぐるみで取り組むカリキュラム・マネジメント』 (2016)、ぎょうせい.
- (9) 天笠 茂 (2011) 『地域とともにある学校づくり－学校・家庭・地域に“好循環”を生む－』、教育委員会月報 63(6)、2-7.
- (10) 網藤清次 (2009) 『家庭・地域社会と連携した学校経営に関する研究－先進校の事例と公立 A 中学校での実験からの探求を通して－』、広島大学大学院教育学研究科博士課程前期教職高度化プログラム.
- (11) 広田照幸 (2003) 『教育には何ができないか』、春秋社.
- (12) 天笠茂 (2015) 『地域との新たな協働を図る学校づくり』、ぎょうせい.
- (13) 妹尾昌俊 (2015) 『変わる学校、変わらない学校－学校マネジメントの成功と失敗の分かれ道』、学事出版.
- (14) 北神 正行 (2011) 『「つながり」で創る学校経営』、ぎょうせい.
- (15) Keyword Project+Psychology:心理学事典のブログ、2014 年 3 月 20 日 (最終閲覧日: 2018 年 1 月 20 日)
<http://digitalword.seesaa.net/article/392048404.html>